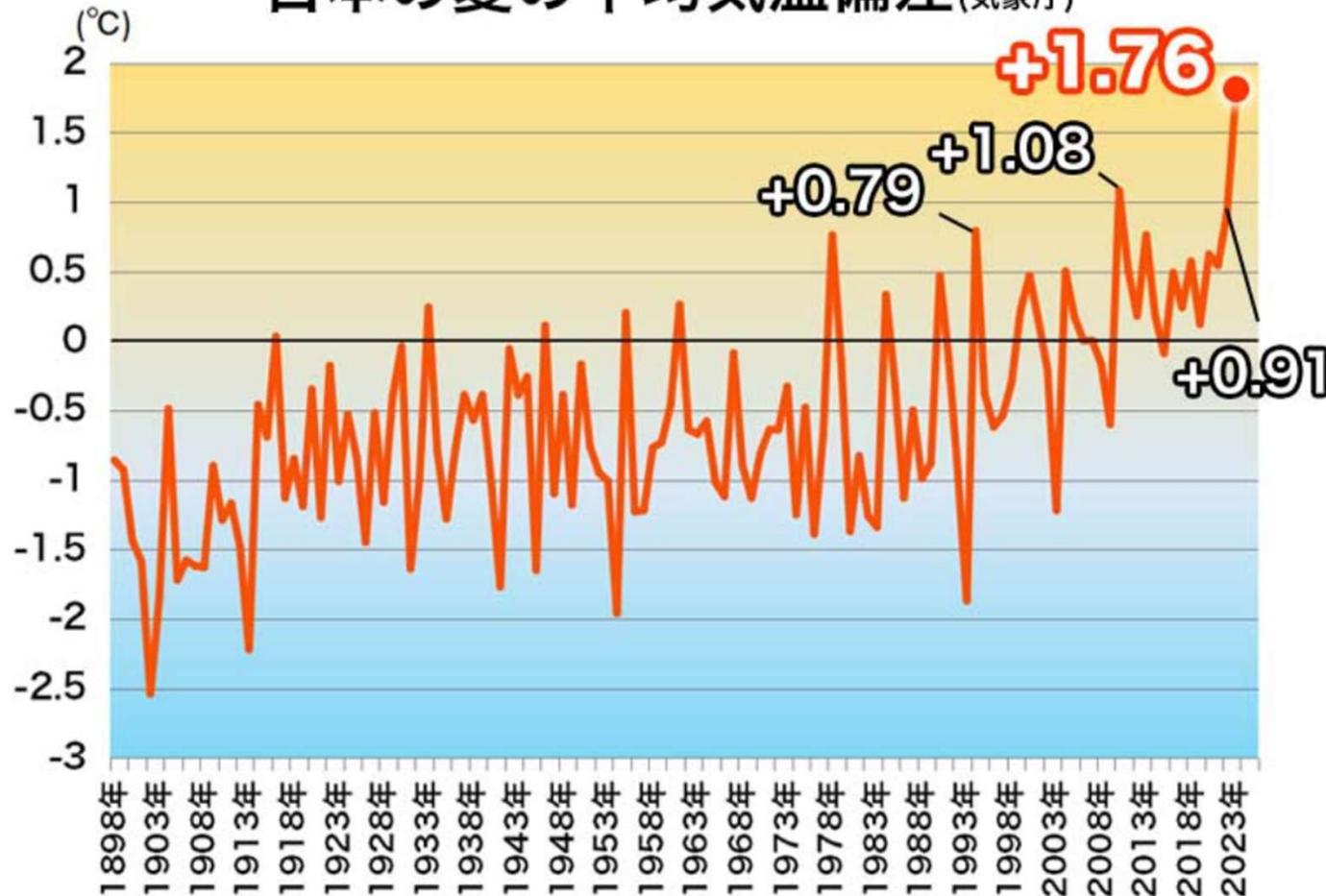


農業を襲う気候危機

農民組合大阪府連合会
事務局長 中西顕治

2023年 記録的な猛暑

日本の夏の平均気温偏差(気象庁)



昨年9月に気象庁が
発表したまとめ

最高気温が35°C以上の猛暑日の連続記録は兵庫県豊岡市で22日、福井県福井市で20日に達した。

2023年	1.76
2010年	1.08
2022年	0.91
1994年	0.79
1978年	0.76

猛暑の影響

2023年夏の猛暑で米に大きな影響が出ていると新聞でも報道されました。余りの暑さで米の生育に障害が発生して品質が確保できなかつた。特に日本海側が強いフェーン現象のため顕著。

農水省は31日、2023年産水稲うるち玄米の1等米比率が、9月末時点で59・6%だと発表した。現行検査が始まった04年度以降で過去最低だった10年度産の62%（産足値）を下回る。猛暑の影響で、東北や北陸の主産地を含む11県で前年同期より10%以上下落した。新潟県は60・9%下落して13・5%だった。1等米が減ることでも農家の収入も減り、経営への打撃とないことが懸念される。

全国の1等米比率は前年同期比では16・2%以下下落した。都道府県別で10%以上上下がったのは新潟の他、秋田、宮城、山形、福島、茨城、富山など、等級低下の理由について同省は「高温・渇水で白米熟粒が増えた」（穀物課）と説明した。

の検査数量は全体の4割。同省は今後、北海道や東北の産地、晩生品種の検査結果が反映されると、「1等米比率は」上がっていく傾向がある（同）としている。

品種別に見ると、全国の「コシヒカリ」の1等米比率は47・4%（前年同期より23・7%）の検査数量は全体の4割。同省は今後、北海道や東北の産地、晩生品種の検査結果が反映されると、「1等米比率は」上がっていく傾向がある（同）としている。

高湿下でも白米熟粒になりにくい特徴を持つ高温耐性品種のうち、新潟県の「新之助」、富山県の「富貴」は、1等米比率9割以上を維持した。一方で、1等米比率を落とした耐性品種も

進める必要がある」と述べた。同省は23年度補正予算でこれらの支援を具体化する。（古田島知則）

猛暑影響、農家に打撃

1等米59%過去最低

9月末時点

水稲うるち玄米の1等米比率 (9月30日時点)

道府県	2023年度 (%)	
	2023年度 (%)	前年比 (%)
北海道	86.4	▲ 7.2
青森	68.9	▲ 23.3
岩手	92.5	▲ 4.3
宮城	84.0	▲ 13.4
秋田	62.6	▲ 30.0
山形	54.7	▲ 41.7
福島	76.2	▲ 19.1
茨城	57.1	▲ 10.5
栃木	88.1	▲ 6.2
群馬	64.1	▲ 5.0
埼玉県	32.1	▲ 5.7
千葉県	88.3	▲ 1.5
東京都	16.8	▲ 44.0
神奈川県	80.7	▲ 11.0
山梨県	95.6	▲ 2.8
長野県	80.4	▲ 5.0
新潟県	13.5	▲ 60.9
富山県	56.8	▲ 28.9
石川県	79.6	▲ 1.9
福井県	85.0	▲ 4.5
岐阜県	42.9	▲ 5.0
愛知県	20.8	▲ 8.2
三重県	31.6	▲ 8.4
滋賀県	57.4	▲ 7.8
京都府	62.7	▲ 6.5
大阪府	20.7	▲ 5.3
兵庫県	30.3	▲ 3.2
奈良県	78.8	▲ 7.1
和歌山県	13.5	▲ 0.9
鳥取県	36.3	▲ 13.1
島根県	52.6	▲ 7.8
岡山県	76.7	▲ 3.4
広島県	86.6	▲ 1.1
山口県	78.8	▲ 2.7
徳島県	42.1	▲ 3.8
香川県	8.5	▲ 1.0
愛媛県	40.7	▲ 6.1
高知県	20.9	▲ 4.9
福岡県	11.0	▲ 2.4
佐賀県	76.0	▲ 15.0
長門県	45.0	▲ 5.0
熊本県	29.3	▲ 0.5
大分県	64.4	▲ 10.2
宮崎県	61.7	▲ 1.3
鹿児島県	37.6	▲ 9.7
沖縄県	58.3	▲ 14.7
全国	59.6	▲ 16.2

※はマイナス、東京都は検査実績なし、22年9月30日時点との比較 (農水省の資料を基に作成)

米の等級とは



米の高温障害例



野菜も夏枯れ

夏から初秋に種をまく冬物野菜は夏の暑さが厳しくて、最適な発芽温度にならずに育たない例も散見された。

堺市で水菜や小松菜をハウス栽培している農家は、豪雨によってハウス内に水が染み出し、その後の高温で野菜が蒸れて全滅した。

冬・早春に収穫するブロッコリーを栽培している泉佐野市の農家は、秋口に出荷が早まったり、葉菜類はトウ立ちするものも出てきた。

早く育ちすぎ出荷時期が早まるなど、蓄積した経験の想定外ことが起きている。

③ 高温と乾燥 酷な残暑

記録的な猛暑の影響が、産地に広がっている。秋冬野菜の産地では、定植に踏み出せない事態が表面化。高温に乾燥も重なり、苗を植えても成長が見通せないためだ。収穫が進む夏秋野菜では、着花不良による収量減といった被害が広がる。病害虫の多発を懸念する声もある。

9/2日曜

枯死懸念 定植遅れ

着花不良で収量減

野菜ぐったり



葉が変色したキャベツの苗（群馬県邑楽町で）

■秋冬産地

「本来ならハクサイの定植を始める時期だが、今年はまだなかなか踏み切れない」。群馬県邑楽町の農業法人・V egetaの松島重倫代表は言う。ハクサイは15日で栽培し、例年なら定植は8月下旬に始める。だが、今年は高温の上で雨が少なく、植えても枯死しかねない懸念。5月のキャベツでは定植を始めたが、「高温が続けば枯れる可能性もある」と、天候を心配する。管内のJA邑楽緑林は、これから定植が本格化するキャベツやハクサイで「定植以降の

■夏秋産地

異例の高温が続く北海道でも被害が出ている。中央部ではJAびえいで、トマトが着花不良で結実せず、収量の半分に下がった。別荘地でも見込みという。結実しても軟化や日焼けが多く、廃棄やC品の発生が増えている。「実が大きくならないうちに着色が進み、小玉の割合も高い」（同JA）。

作業がすれ、収穫が遅れる可能性もある」（園芸指導課）と指摘。対策として「定植後は地道に水をやり続けるしかない」と話す。茨城県西部のJA茨城ひつみ管内でも、キャベツ、レタスの定植が遅れ気味だ。一部農家は定植できずに苗が老化し、播き直しして約1カ月遅れになるケースも、定植済みの農家も、散水などの対応に追われる。同県東部のJAなめがたしおさい管内でも、ニンジンやダイコンは播きができない状況が続く。県総合農業センターは「高温でネギのアザミウマ類など害虫の発生も一部でみられる」と言う。

昆虫が減り害虫が増える

- 農薬の使用で昆虫が減少
有機リン系農薬でタガメ、ゲンゴロウなどが絶滅危惧
ネオニコチノイド系農薬でミツバチ等が減少
- 温暖化で害虫が増えている
従来であれば越冬できない種類の昆虫が
温暖化の影響で越冬繁殖する
カメムシ類、オオタバコガ、トビイロウンカ



食料自給率の向上が必要

- 日本の食糧自給率は38%といわれている。
肥料、種子の海外依存は8割以上
実質的な自給率は10%に満たない。
- 世界では飢餓人口がすでに8億人を超えている
世界人口の1割が飢餓状態である中、国内生産
を強化せずに輸入に頼り続けるのはいかなものか。